2012. 11.15 No.41

文教大学の授業

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
TEL 048-974-8811 〒343-8811

学歴について考える
―論理性と実証性を身に付けるために―

教育学部 千 葉　聡 子

1960年、東京都生まれ。専門は教育社会学。1996年から文教大学教員。高校時に大学で社会学を学ぼうとひらめき、大学では家族社会学を学ぶ。大学卒業後、自動車メーカーに就職するが、そこで女性の能力開発のあり方に疑問をもち、大学院にて教育社会学、特に成人女性の学習を中心に学ぶ。現在は、学校教育を中心に据えた近代的教育環境の分析とその中での家庭教育の位置などについて関心をもっている。

（ちば　あきこ）

何年やっても授業は難しい。「大変面白いことを知ったから、これを伝えたい」ということが教える際の力の源となっているが、そもそも私が面白いと思うことは面白いことなのか、学生が授業に求めていることは将来就く職業に役立つことなのではないか、でもそれでいいのか、などといろいろ考えてしまう。いろいろ考えながら行っている「教育社会学」という授業をここでは紹介する。

1．「学歴」について考える授業

「教育社会学」が扱う内容は多岐にわたる。教育現象と考えられるものであれば、教育政策の評価から寿司職人の技術の身に付け方まで、何でも研究対象とすることが可能であるが、共通する点は、常識を疑うことから生じた新たな視点によって事実を掘り起し、その事実によって社会現象、最終的には現在の社会像をこれまでとは違う視点から説明することにある。ここにあるおもしろさは、常識を疑うことと納得のいく説明すること、そのための論理性と実証性を如何に備えられるかにある。このような特徴を何とか示し、そこから学問のおもしろさを知ってほしいと考え、教育社会学の授業では「学歴」をテーマに据えた。

学歴の見方はいろいろあるが、一般には厳しい。授業では毎回リアクションペーパーにあたるものを配布し、出席の確認と授業内容への意見や質問を収集しているが、学歴という言葉を出しただけで「学歴で人を判断するのはまちがっている」という意見が必ず、そしてたくさん書かれる。確かに学歴で人を判断するのはまちかっている側面はあるが、学歴で人を全く判断しないことも近代社会においては間違っている。このことを説明することが授業のテーマになる。

また、学歴は個人のアイデンティティやプライドとも関わる面があり、扱いにくいテーマであり、どちらかといえば嫌われるテーマであると思う。しかし私も学生も、逃げるわけにはいかないテーマだとも思う。特に学校

で仕事をする人には、学歴についての認識を深めてもらう必要がある。学歴は個人にとって大きな意味をもつが、それだけでなく、近代社会の原則である業績主義を成り立たせるためにも存在している学校制度を、正確に理解する際には、学歴のもつ合理性を認識する必要があろう。そもそも学歴を作り出すサイドに立つ以上は、学歴に対して他人事のように批判しているわけにはいかない。授業では、この学歴の合理性について複数の側面から説明していく。その合理性に気づくことによって、これまでの学歴、学校教育に対する学生の常識を変えることできれば、授業の意味が出てくる。

しかし、学歴が何等かの問題を孕んでいることも事実である。授業を聴き、学歴について学習したことで、再度リアクションペーパーに書いた学歴の理解から、学校教育現場においてさらに考察し、感情的な印象とは違う確かな地点から問題を見出し、さらに発言していってもらいたい。そのように育ってもらえれば私としては大満足なのだが。

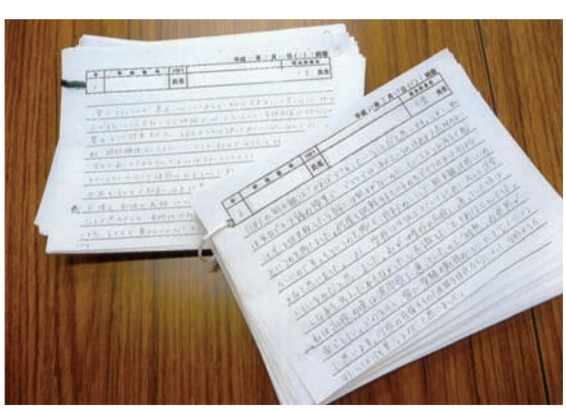
2．講義のよさとは何か

教育社会学の授業は100名を超えることは普通で、150名を超えることもよくある。学生が多様化し授業方法の工夫が求められてきている中、教員からすれば人数が少ない方が工夫はしやすいし、何よりストレスが少ない。学生にとっても双方向的で面倒見のよい授業が行われる可能性が高く、少人数の授業の方が望ましいということになる。講義という授業形態は今後の大学改革の焦点になろうが、改革と言われても大学の現状は簡単に変わらない。そこで敢えて、評判が悪い大規模講義形式の授業のよさを主張してみよう。

講義形式の授業に制約が多く適正規模があると断ったうえで、講義形式の授業が伝えるべきメッセージの一つは、論理性と実証性をもった説明の強さだと思う。自分自身が動き考えることによって、新たな世界を発見できる人間に育て上げることが大学教育の最終目的であろうが、論理的な説明によって物事を理解した時、また確かな証拠によって新たな事実を突き付けられた時に覚える知的興奮の機会を、できるだけ多く作っていくことも大学教育の目指すべき点だと思う。「はっきりわかっていなかったことが本当にわかった。納得できた」という場を作ることは、知識伝達型の講義でもできること、むしろ知識伝達型であるからこそできることなのではないか。またこのことは研究者としての大学教員が得意とすることであり、これまでの大学教育がずっと行ってきたことであろう。これを続けていきたい。

「わかった」「納得できた」という経験は学校教育のどの段階においても大切なことである。なぜならこの経験がもっと学びたい気持ちにつながっていくからだ。だからこそ、大学教育でも大切なことになる。また教師となる学生には、論理性と実証性という技を身に付け磨くことの重要性も認識し、良質な知識を伝達できる人間に育ってほしい。しかし、そんなメッセージを私の授業は発信できているのか。自信がないところである。自信がないのでよりよい説明の仕方を私自身も学び、考え、実証性の高いデータを探すという日が続く。大勢の学生を納得させることを目指して頑張るしかない。

ここまで書いて、改めて授業は難しいと感じたが、人を育てるための力の出しおしみは、教員としてだけでなく大人としても許されない。大学で学ぶとは何かを自分に問いながら、授業を作っていこうと思っている。



ぎっしりと書かれた、リアクションペーパー。